



日本植物病理学会ニュース 第9号

(1999年2月)

【今後の本学会の活動予定】

1. 平成11年度大会開催予定

日時：平成11年4月2～4日（金～日）

会場：新潟市，新潟大学教養校舎

問合せ先：新潟大学農学部

日本植物病理学会大会事務局

Fax 025-262-6854

詳細については学会報64(5) 青頁参照

2. 談話会，研究会開催予定

(1) 第2回植物病害生態研究会

日時：平成11年4月1日（木）

会場：新潟市，第一総合生協校舎

問合せ先：北陸農業試験場 藤田佳克

Tel 0255-26-3242, Fax 0255-24-8578

E-mail: fujitaa@inada.affrc.go.jp

詳細については学会報65(1) 青頁参照

(2) 第9回殺菌剤耐性菌研究会

日時：平成11年4月5日（月）

会場：新潟市，新潟大学教養校舎

問合せ先：農業環境技術研究所 石井英夫

Tel & Fax 0298-38-8326

E-mail: hideo@niaes.affrc.go.jp

詳細については学会報64(6) 青頁参照

(3) 第6回バイオコントロール研究会

日時：平成11年4月5日（月）

会場：新潟市，新潟大学教養校舎

問合せ先：バイオコントロール研究会事務局

農業生物資源研究所 土屋健一

Tel 0298-38-7053, Fax 0298-38-7408

E-mail: kentsuch@abr.affrc.go.jp

詳細については学会報64(5) 青頁参照

(4) 平成11年度植物感染生理談話会

日時：平成11年7月14～16日（水～金）

会場：大分県湯布院町，九重レークサイドホテル

問合せ先：九州大学大学院生物資源環境科学研究所

植物病理学研究室 高浪洋一

Tel & Fax 092-642-2835

E-mail: takanami@agr.kyushu-u.ac.jp

詳細については学会報65(2) 青頁に掲載予定

(5) 第20回植物細菌病談話会

日時：平成11年9月下旬

会場：山形県鶴岡市，出羽庄内国際村鶴岡国際交流センター

問合せ先：山形大学農学部 富樫二郎

Tel & Fax 0235-28-2842

詳細については決定次第学会報青頁に掲載予定

【今後の関連学会情報】

1. 日本農薬学会第24回大会

日時：平成11年3月25～27日（木～土）

会場：栃木県宇都宮市，宇都宮大学

問合せ先：宇都宮大学 竹内安智

Tel 0286-49-5150

2. 日本応用動物昆虫学会第43回大会

日時：平成11年4月2～4日（金～日）

会場：沖縄県那覇市，琉球大学

問合せ先：沖縄県農業試験場 垣花廣幸

Tel 098-884-3417

3. 第16回農業生物活性研究会シンポジウム

日時：平成11年4月16日（金）

会場：東京農業大学校友会館（グリーンアカデミー）

問合せ先：東京農業大学 根岸寛光

Tel 03-5477-2261, Fax 03-5477-2616

4. 平成11年度日本菌学会大会（第43回大会）

日時：平成11年5月22～23日（土～日）

会場：青森県弘前市，弘前大学共通教育棟

問合せ先：弘前大学農学生命科学部 原田幸雄

Tel & Fax 0172-39-3816

5. 平成11年度日本土壌微生物学会大会

日時：平成11年5月27～28日（木～金）

会場：山口市，ぱ・る・るプラザYAMAGUCHI

問合せ先：山口大学農学部 丸本卓哉
Tel & Fax 0839-33-5835

【今後の関連国際会議情報】

1. **International Conference on Emerging Technologies for IPM** : North Carolina State University, Raleigh, NC, USA, March 7-10, 1999
http://ipmwww.ncsu.edu/ipmconference
2. **20th Fungal Genetics Conference** : Asilomar, CA, USA, March 23-28, 1999
http://www.kumc.edu/research/fgsc/asilomtg.html
3. **9th International Society for Molecular Plant-Microbe Interactions (MPMI) Congress** : Amsterdam, The Netherlands, July 25-30, 1999
http://www.scisoc.org/ismpmi/meetings/meeting.htm
4. **XIV International Plant Protection Congress** : Jerusalem, Israel, July 25-30, 1999
http://www.kenes.co.il/IPPC
5. **XVI International Botanical Congress** : Saint Louis, MO, USA, August 1-7, 1999
http://www.ibt99.org
6. **Second World Congress on Allelopathy** : Thunder Bay, Ontario, Canada, August 9-13, 1999
http://www.lakeheadu.ca/~allelo99
7. **The First International Powdery Mildew Conference** : Avignon, France, August 29-September 3, 1999
E-mail: powdery.mildew@plg.ulaval.ca
8. **2nd International Fusarium Biocontrol Workshop** : Dijon, France, September 15-17, 1999
E-mail: Alabouvette@dijon.inra.fr
9. **2nd Pan-Pacific Conference on Pesticide Science** : Honolulu, HI, USA, October 24-27, 1999
E-mail: d_ruddy@acs.org

【本学会活動状況 (平成10年6月~11月)】

1. 地域部会活動状況

(1) 部会開催状況

① 北海道部会

平成10年9月8~10日, 北海道農業試験場畑作研究センター (芽室町)

② 東北部会

平成10年10月8~9日, 磐梯熱海温泉清稜山倶楽部 (福島県郡山市)

③ 関東部会

平成10年10月2日, 東京大学農学部 (東京都文京区)

④ 関西部会

平成10年10月16~17日, 滋賀県立大学 (彦根市)

⑤ 九州部会

平成10年9月17~18日, 武田ビル(福岡市博多区)

(2) 部会開催報告

① 北海道部会

平成10年度の北海道部会は9月8日(火)と9日(水)10日(木)の3日間にわたって, 芽室町の北海道農業試験場畑作研究センターで開催された。参加者は約110名であった。8日は午後からシンポジウム形式の談話会を行い, 「ジャガイモの病害について」というテーマで5名の方に講演をお願いした。そうか病・半身萎ちょう病・疫病・ウイルス病・耐病性育種についての講演がなされ, 広く活発な論議がなされた。夕刻には懇親会が開かれ, なごやかな歓談が2時間続いて終了した。翌日の9日には9時30分から一般講演が行われた。分子生物学的基礎研究から防除に関する研究, 新病害の性状など22題の講演が行われ, 活発な論議がなされた。昼休み後には総会が開催され, 庶務, 会計報告が承認された。また小林喜六部会長が任期を終えるに当たり, 北海道立北見農業試験場長の児玉不二雄氏が次期会長に決定した。引き続き一般講演と活発な論議が5時頃まで続いた。3日目の10日にはエクスカッションが行われた。ジャガイモそうか病防除試験圃場, ダイコンバーティシリウム黒点病発生圃場, 日本甜菜製糖株式会社ビート資料館などを見学し, 午後3時に解散して本年度の部会を成功裡に終了した。(秋野聖之)

② 東北部会

平成10年度(第34回)東北部会は10月8日(木)13時から9日(金)13時にかけて福島県郡山市磐梯熱海温泉清稜山倶楽部で開催された。一般講演ではこれまでで最高の40題(ウイルス・ウイロイド15題, 細菌病4題, 糸状菌病21題)の発表があり, 122名の参加者のもと熱心な質疑応答が行われた。特別講演には三重大学生物資源学部助教授伊藤進一郎氏(10月1日付けで森林総合研究所東北支所から転任)を迎え, 「養菌性キクイムシの加害による樹木の枯死一特に日本海側に発生するナラ類の集団枯死被害について」の題でご講演いただいた。8日の講演終了後には, 112名の参加を得て研究情報交換会が開かれ原田幸雄部会長の挨拶に続いて山中達名誉会員の音頭による乾杯後, なごやかな交流が続いた。9日(8時30分)に開かれた総会では, 会務報告, 学会や懇親会の開催状況, 学会の近況, 収支決算等の報告がなされた。また, 次年度の部会長および部会幹事等を選任, 部会長には秋田県立農業短期大学の松本勤教授を選出し, 次年度開催地は青森県に決定した。(中島敏彦)

③ 関東部会

平成10年度関東部会は、10月2日(金)午前9時から東京大学農学部1号館で開催された。日比忠明部会長の挨拶の後、46題(菌類病関係18題、細菌・ファイトプラズマ病関係16題、ウイルス病関係10題、線虫病関係2題)の研究成果が、午前18題、午後28題に分かれて発表された。220余名の会員が参加されて活発な討議が行われ、午後6時頃予定通りに終了した。講演終了後、東京大学山上会館において約70名の参加を得て懇親会がもたれ、なごやかなうちに懇親の実を上げた。最後に、本年度の部会を無事終了できたのは会員の皆様のご協力の賜物であると深く感謝申し上げる。(日比忠明)

④ 関西部会

平成10年度関西部会は、10月16日(金)と17日(土)の両日にわたって滋賀県立大学交流センターで開催された。台風10号の接近の影響であいにくの天気ではあったが、300人近い出席者があり、一般講演では82題(ウイルス10題、細菌12題、糸状菌60題)の研究成果が2会場に分かれて発表され、活発な質疑応答でしばしば予定時間を超過していた。部会初日夕刻には約130名の参加を得て恒例の懇親会が盛大に行われた。部会開催地委員長但見明俊氏の歓迎挨拶、地元の名誉会員獅山慈孝氏の音頭による乾杯後、2時間余にわたりなごやかな歓談が続いて終了した。役員会は部会初日の10月16日午前10時から滋賀県立大学で開催された。庶務、会計などの報告が承認された後、部会会則に基づく選挙により平成11年度部会長に京都府立大学堀野修氏が選出されたことの報告があり、了承された。また平成11年度の部会開催地として八丁堀シャンテ(広島市)を、同開催地委員長として半川義行氏が選出され、さらに部会幹事として久保康之氏が、開催地幹事として奥尚氏がそれぞれ推薦された。これらの案件は16日午後の総会において提案され、承認された。(古澤 巖)

⑤ 九州部会

平成10年度九州部会は、9月17日(木)と18日(金)の2日間、九州農業研究会との共催により開催された。17日9時からの講演会への参加者は約140名であり、29題の発表演題のうち、糸状菌病13題、ウイルス病11題、細菌病3題、ウイロイド・マイコ病2題であった。部会は本大会と異なり、一会場のみ講演会を設定できるので、参加者が各種の病原体についての講演を聞くことができることが、最大のメリットであろう。大学および県試験研究機関から、先端技術を用いた試験研究や診断技術についての発表があり、現場対応に新技術を活用するとの意気込みが感じられた。18日には、本部会の企画により実施しているシンポジウムの第23回目を開催した。話題提供として、イネ

もみ枯細菌病の病徴発現機構に関する研究(鹿児島川辺農改普所、飯山和弘氏)、日本に発生するジェミニウイルスについて(九州農試、大貫正俊氏)ならびにナスすすかび病の生態と防除(佐賀農業セ、山口純一郎氏)の3題について発表があり、活発な論議が行われた。なお、17日18時から、恒例の応用動物昆虫学会九州支部会会員との合同懇親会が開催されて、これまた盛会であった。(佐古宣道)

2. 研究会開催報告

(1) 平成10年度植物感染生理談話会

平成10年度植物感染生理談話会は125名の参加を得て、平成10年7月16日(木)、17日(金)および18日(土)の3日間にわたり、神戸市灘区六甲台町の神戸大学滝川記念国際交流会館で開催された。今回のテーマは植物と病原体の情報応答機構(Mechanisms of Signal Transduction in Plant-Microbe Interactions)とした。初日午後からは動物細胞におけるストレスによる情報伝達関連酵素の活性化機構およびRNA結合蛋白質による神経細胞分化誘導機構について神戸大学バイオシグナルセンターおよび同理学部から特別講演を願い、引き続いて、ウイルス病から「ウイルスゲノムの変異と環境適応」「ササゲにおけるCMV抵抗性の分子機構」「N遺伝子が単離されてからのTMV研究」の3題、2日目は細菌病および土壌微生物の話題から、「生物発光株とトランスポゾン変異株を用いた*Ralstonia solanacearum*の病原性解析」「植物病原細菌のエリクター生産・分泌関連遺伝子について」「マメ科植物における共生窒素固定根粒形成の分子機構」「植物生育促進菌類による抵抗性誘導とその機構」および糸状菌病から「細胞骨格による植物の抵抗性発現機構」「植物の病原体認識とシグナル伝達—細胞壁(アポプラスト)から核へのシグナル伝達」「ジャガイモ塊茎における防御遺伝子発現とそのシグナル伝達」「タバコ培養細胞におけるエリクターによる細胞死誘導機構」の7題、3日目も引き続いて糸状菌病から「エンパクにおける抵抗性発現とアポトーシス」「植物の抵抗性と防御応答に関する遺伝子発現」の1題の講演が行われた。最後に総合討論を行い、植物と各種病原体との相互認識と情報伝達の分子機構について活発な討論が行われ、この分野の現状と今後の問題点の理解を深めることができた。また、レセプションおよび明石大橋ナイトクルージングの懇親会を通じて有意義な学術交流の機会も持った。運営は主として、神戸大学農学部植物病理学研究室のスタッフと学生諸君で行った。ご参加いただいた方々に記して感謝の意を表したい。平成11年度の植物感染生理談話会は九州大学の高浪洋一氏にお世話いただき九州地区で開催されることとなった。本談話会の講演集(1部2,500円)をご希望の方は、談話会事務局(神戸大学農学部内、Fax 078-803-0999)までご連絡下さい。(真山滋志)

(2) 第19回土壌伝染病談話会

第19回土壌伝染病談話会は「21世紀における土壌伝染病研究のさらなる発展をめざして」というテーマを掲げ、平成10年10月21日(水)と22日(木)の両日、140余名の参加を得て東北大学医学部長陵会館で開催された。はじめに、遺伝子工学技術の利用による土壌病害研究の進展の成果を確認し、今後この技術の利用がとくに期待される研究分野について展望が示された。つぎに、20年前の第9回土壌伝染病談話会で熱心に討論され、参加者の関心を集めた「発病抑止土壌」の研究について現時点で総括し、新たな展望を切り開くため5人のエキスパートの方々からの話題提供があった。なお発病抑止要因の特定が残されている病害も多々あり、境界領域の研究者との共同研究が望まれる。主要畑作物の土壌病害の発生生態と防除のセクションではエンドファイトによるハクサイ根こぶ病と非病原性軟腐病菌によるハクサイ軟腐病の生物防除、さらに馬鈴薯そうか病プロジェクトチームの成果ならびにアズキの主要3病害の生態と防除の現状が報告された。最終日のエクスカージョンでは有機性排出物の発酵による循環システムとして国の内外で注目を集めているハザカプラントを見学した後、同社の会議室で1時間にわたり63名の参加者と社長との熱心な話し合いがもたれた。次回は2年後の2000年に熊本で開催される。(菊本敏雄)

【学会関連各委員からの報告】

1. 日本学術会議報告

平成10年10月28～29日に開催された総会と、7月2～3日および10月27～28日に開催された第6部会について簡単に紹介する。なお、詳細は本会記事を参照していただきたい。総会では、会則改正等の議題のほか、「新たな研究理念」、「学術研究の方向性」、「総合科学技術会議の緊急設置」、「俯瞰型プロジェクトの発足」について自由討議を行った。結論を取りまとめるには至らなかったが今後の参考とすることにした。7月の信州大学繊維学部での第6部会では、「これからの地球環境を考える」というテーマで公開学術講演を行った。10月の第6部会では、日本学術会議第6部会員、農学系の大学長、学部長等、農学系の国立試験研究機関の長等の現職および経験者が中心となって構成される「農学の領域において指導的役割を果たし、もって我が国および世界の農学の発展に寄与する」ことを目的とした農学アカデミーの設立が提案され承認された。

(土崎常男)

2. 日本学術会議微生物研究連絡委員会報告

微生物連絡委員会(微研連)は三輪谷俊夫委員長、篠田純男、鈴木益子、宮治 誠幹事を中心とした合計18名からなる委員会であり、本年度に入って、5月と11月に委員会を開

催し、主に次のことを審議してきた。1) 学術会議第17期の活動方針と第6部微生物研連の学術研究領域での課題、問題点および将来、2) IUMS(国際微生物連合)への役員推薦や関わり方、3) IUMSのアジア版のFAMPS(アジア微生物連合)への加盟と参加のあり方、4) 生物多様性世界戦略下における微生物遺伝子資源を巡るカルチャーコレクションの役割や我が国のあり方、5) 微研連主催または共催の公開講演会や公開シンポジウムの企画・調整、等。IUMSやFAMPSで積極的に活動する役員が求められている。また、微生物遺伝子源の我が国での戦略的活用のある方法が問われている。(道家紀志)

3. 日本学術会議植物防疫研究連絡委員会報告

平成10年9月9日に開催された第3回委員会および11月13日に開催された第4回委員会について簡単に紹介する。なお、詳細は本会記事を参照していただきたい。第3回委員会では(株)トーメン・アグロテックの和田哲夫氏から「天敵昆虫利用の現状」について、および第4回委員会では、国立環境研究所の森田昌俊氏から「内分泌攪乱物質問題の現状と問題点」についてそれぞれヒアリングを行った。また、11月13日の午後、植物防疫研究連絡委員会の主催で第4回植物保護・環境シンポジウム「遺伝子組み換えによる作物保護の諸問題」を日本学術会議講堂で開催し、応用動物昆虫学会、植物病理学会、雑草学会および農薬学会の各1名がそれぞれの分野から講演された。植物病理学会からは東京大学の日比忠明氏が「病害抵抗性遺伝子組み換え作物の現状と問題点」について講演を行った。参加者約200名と盛会であった。(土崎常男)

【第7回国際植物病理学会議の紹介】

1. 概要

第7回国際植物病理学会議(ICPP98)は、98年8月9日から16日までの8日間、英国スコットランドの古都エジンバラにおいて、エジンバラ国際会議センター(EICC)を会場にして開催された。本会議は、英国植物病理学会(BSPP)が国際植物病理学会(ISPP)の委託を受け、英国王女の後援の下に主催したもので、大会会長はイングラム教授が、組織委員長はスコット博士がつとめた。参加者(事前登録者)は約2,300名、うち日本人は約150名であった。会議は9日の登録手続きとその夜の簡素な歓迎レセプションを振り出しに、翌10日、アン王女御臨席のアッシャーホールでの開会式と記念講演から本格的に開始された。

会議の全体プログラムは、(1)植物-病原体相互作用、(2)集団生物学・生態学・疫学、(3)現場における植物病理学、(4)地球的展望、(5)新防除技術、の5大テーマで構成され、シンポジウムとポスターセッションの2部門に分かれて数多くの発表があった。シンポジウムでは、上記

の各テーマごとに6~14のサブテーマ、合計47のサブテーマが生まれ、各サブテーマごとに5~7課題、全体で約300課題の講演発表があった。シンポジウムは毎日午前8時半から午後5時半までで、午前10時と午後3時のティータイムには各30分、昼食時には2時間をあてた比較的余裕のあるタイムスケジュールであった。一方、ポスターセッションでは、各ポスターが上記の区分に則りながら全体で15のグループに分けられ、会期の前半と後半で交代して2日半ずつ展示されたが、合計約1500題にも上る発表があった。このほかに任意のテーマによるイブニングミーティング(午後6時半~8時45分)が35本あり、さらに、32の企業・団体の展示も行われた。主会場となったEICCはエジンバラ市の中心部に位置する地下1階地上3階建の円形で会議機能に徹した現代建築で、会期中は全室がフル稼働の状況であった。EICCと宿泊施設間の輸送バスも連日運行された。ポスターはEICCに隣接した特設テント会場とシェラトングランドホテル内の会場との2か所に展示されたが、発表数が多いためかなりの密集状態であった。

5年ごとに行われるこうした大規模な学会の性格上、各シンポジウムでの冒頭の基調講演は過去5年間の研究の総括という内容が大多数であり、また、シンポジウムにトピックスとして拾われた課題もすでにひとつの仕事としてまとまったものが大部分であったため、これまでの知識の復習や研究動向の整理には役立ってもホットな話題という点ではややもの足りないくらいがあった。その点、ポスターは玉石混交ながら、かなりホットな研究発表も含まれていたように思われる。ただし、こちらはなにしろ数が多いため、シンポジウムの合間を縫ってポスター会場に駆けつけ、迷路のどこに目的とするポスターがあるのか、そこにたどり着くまでにいい加減くたびれてしまい、ましてその発表者に直接会って議論できればそれは僥倖であるといってもよい状況であった。各専門分野ごとのトピックスに関してはそれぞれご担当のレポーターのご報告をご覧ください。また、全体的な傾向として、基礎研究では植物-病原体相互作用に関する分子生物学的研究が、防除研究ではバイオコントロールや病害抵抗性トランスジェニック植物の開発研究が、世界的にますます盛況をきわめているという印象であった。なお、これらの研究分野も含めて、日本の研究は十分世界に比肩し得るレベルにあり、優れたポスター発表課題も多かったにもかかわらず、今回のシンポジウムの招待講演者としては日本の研究者は数人に限られ、圧倒的多数が欧米の研究者で占められていた点はいささか残念であった。これは言語の問題や今回の会議プログラムが英国主導でオーガナイズされたことによると思われるが、今回、本会議に参加した大勢の日本の若手研究者が、この経験を生かして、次回の会議の場ではさらに大いに活躍して下さることを期待したい。

さて、こうして会議は最終日を迎え、14日の閉会式において、次回第8回の会議が2003年2月2~8日にニュージーランドのクライストチャーチで開催されるとの紹介があり、バグパイプの演奏とともにISPP旗がニュージーランド代表に手渡された。今回の会議の成果を礎に、新世紀にかけての次の5年間で世界ならびに日本の植物病理学がどのような発展を遂げるのか、楽しみなことである。その夜は、スコットランドの酒と料理と踊りを楽しむフェアウェルパーティーで盛り上がり、午後11時に無事閉会に至った。翌15日にはスコットランド王立植物園やスコットランド作物研究所などの研究機関を見学する数コースのサイエンティフィックヴィジット、17~19日には樹病学関係など数コースのポストコングレスツアーがそれぞれ実施された。会期中の天候は、この地方特有で変わりやすかったが、ほぼ穏やかで冷涼な日が続き、会議の合間にはエジンバラ城を訪ねる人々の姿が目立った。

なお、会期中に開かれたISPPの評議員会ではハミルトン会長、ヴァーマ事務局長、シェファード会計長らによるこれまでの活動報告に引き続き、一部規約の改正や広報活動等に関して若干の議論があった。また、同じく会期中に開かれたアジア植物病理学者の集いでは、中国からアジア植物病理学会(ASPP)の結成と2000年北京における第1回アジア植物病理学会議開催の提案がなされたが、この件については各国が自国の学会に持ち帰ってその対応を協議することとなった。

今回の国際会議では、その事前登録等に際して英国の会議事務委託業者の不手際が多かったが、本会議自体は全体にきわめて良く組織され、運営もほぼスムーズで、膨大なポスターセッションを特設テントの設営で対応した点など随所に事務局の苦心の跡が窺えた。また、ホームページの開設や電話帳3冊分にも相当する分厚いアブストラクト集のCD-ROM化など電子情報化時代に対応した新しい試みもいくつかあって好評であった。10年前、日本でのこの会議(第5回国際植物病理学会議)の開催にあたってその準備のために多くの会員の方々が数年にわたって大変な苦勞を重ねられたことを思い起こし、今回の英国植物病理学会の非常なご尽力に対して深い感謝の意を表したい。

(日比忠明)

2. 菌類病(病原性・病害におけるシグナル伝達を中心に)

最近の国際的な学会の特徴は発表者の皆さんがup-to-dateな研究結果を公表せず、論文が発表されてはじめて発表する傾向にあるので、今回の7th ICPPもあまり期待していなかったが、予想に反し、かなりup-to-dateな発表の連続で興奮を隠し切れなかった。

菌類病と植物の抵抗性遺伝子、さらには防御応答遺伝子の発現制御に関する発表の全般的な印象としては、ここ

1~2年のうちに随分研究が進んでいるなと痛感した。しかし、宿主特異的毒素やサブレッサーに関する口頭研究発表がほとんど無かったのは残念であった。また、国際学会であるゆえ、アフリカ、南米、東南アジアなどの発展途上国からの参加者にも発表の機会を提供すべきであったのだが、配慮が行き届いていないのが惜しまれる。

第1日目は“Gene-for-gene interaction: molecular structures and functions”と題してバハニンゲン農科大学のdeWit教授のopening remarksに始まり、菌類病のgene-for-gene仮説を裏付ける抵抗性遺伝子(*R* gene)と非病原性遺伝子(*avr*)に関してまとめがあった。トマト葉かび病菌(*Cladosporium fulvum*)の*avr9*に対応するトマトの抵抗性遺伝子*Cf9*のcDNAをクローニングし、*Arabidopsis*に形質転換したところ、ナス科植物およびその他の植物種の原形質膜との結合が見られたが、*Arabidopsis*では見られなかった。このことは*avr9*は*CF9*タンパクに結合しないか結合が非常に弱いものと思われる。この結合の強度はHR誘導能と深い関係にある。

また、Barbara Valentはイネいもち病菌(*Magnaporthe grisea*)の*AVR2-YAMO*はヤシロモチの抵抗遺伝子*Pi-ta*に対して古典的なgene-for-gene仮説に準ずる反応を示すこと、また*AVR2-YAMO*を病原性いもち病菌に導入すると*Pi-ta*を保持したヤシロモチは過敏感細胞死を誘導することを発表した。さらに、*AVR2-YAMO*は中性26 kDaタンパク質(Zn-metoloprotease)をコードしていることを明らかにした。

ドイツ、マックスプランクのKnoggeらのグループのクローニングしたオオムギ雲形病菌の*Nip1*(オオムギ抵抗性遺伝子)はオオムギに対する病原性を発揮する場合もあり、 H^+ -ATPaseを活性化する。また、同様の興味深い発見は一部の細菌の*avr*遺伝子産物はハーピン等と同様に病原性因子として働く場合もある。

オーストラリアのEllisのグループはアマさび病抵抗性遺伝子である*L* geneの13種類の本遺伝子産物は核結合部位(nucleotide-binding site)にロイシンに富んだ繰り返し配列(NBS-LRR)をもち、13の抵抗性遺伝子はallelic alternative(対立遺伝子のバリエーション)であること、また、*L1*と*L8*はLRRの領域を欠いており、また*L2*はLRR領域がduplicateされていることを報告した。さらに、抵抗性の抑制遺伝子も同定され、*L10*抵抗性遺伝子に対して*SnL10*が見つかり、*L10*のN-末端側の5アミノ酸部分に欠損変異が起こっていた。すなわち、抑制の原因は正常な*L10*トリガンドを形成する際の競合、あるいは結合阻害かもしれない。これは、特に130アミノ酸のうち6カ所のhypervariable領域に見つかっている。また、宿主特異性はLRRの構造とTIR領域(Toll & Interleukin receptorに対するホモロジー)が関与しているらしいことが提案され

た。

一方、ジョン・イネス研究所のジョナサン・ジョーンズのグループは*Cf-9*の抵抗性遺伝子の構造を明らかにし、(1)まず、*Cf-9*ホモログは少なくとも11個存在すること、(2)LRRのvariantはLXXLXXに見られる β -鎖/ β -ターン領域に見られること、すなわち、欠損とduplicationが起こっていることを明らかにした。

同じく、ジョン・イネス研究所のSchulze-Lefertのグループはオオムギのうどんこ病抵抗性に関与する遺伝子をmap-based cloning法でクローニングし、そのうち*Mlo*遺伝子は533アミノ酸をコードし、7つのtrans-membraneドメインをもつ、おそらく*avr*産物のレセプターをコードしているのではないかと考えた。18種類の*Mlo* homologタンパク質が存在し、お互い構造的に類似している。また、*Ror*変異体(*ror*)は*Mlo*を介した細胞死をblockすること、*Rar1*(novel zuic finger, ring-domain)変異体も*Mlo*による細胞死を抑制することから、*rar1*遺伝子は細胞死のpositive regulatorであろうと推測されている。また逆に、HR細胞死のsuppressorとして*ecd1*がクローニングされた模様だが、その構造解析はこれからの課題である。

UC DavisのBrett Tylorはエリシチンの結合タンパク質をクローニングし、LRRを含む(ただし、一般の抵抗性遺伝子のLRRとは構造的に異なる)N-末端にNBSが見出される、ユニークなレセプターであろうと考えている。

以上、菌類病の抵抗性遺伝子を中心に御紹介したが、SAR(全身抵抗性)、過敏感細胞死に関わる活性酸素種の発表などは余白の関係上省略させていただきたい。

(山田哲治)

3. 細菌病

今回の国際会議では、細菌および細菌病としてのまとまったセッションはありませんでした。5つの大きなテーマにおおよそ従って発表が振り分けられていたため、すべての細菌関係の発表を見たわけではなく、また、自分の発表や、自分の興味に従ってのぞいたりディスカッションをしたりしていたため、かなり紹介に偏りがあるかも知れないことをお断りしておきます。また、多くの日本の研究者のかたのすばらしい発表もありましたが、あえてここでは海外の研究発表にしぼらせていただきました。

いろいろと分散していた発表の中で、シンポジウムの1.5 Gene regulation in plant pathogenic bacteria, 1.7 Behaviour of bacteria on plant surfacesと1.6 Secretion systems and pathogenicity genesの3つだけはまとまって細菌の話題であり、この分野にいかに関心が集まっているかがわかります。いずれも植物と病原細菌が互に相互作用を行っているかを分子レベルで追求するもので、多くの興味ある発表がありました。そのなかで、*hrp-avr*関連遺

伝子について、従来検討されてきた *hrp* 遺伝子群の両側近傍にさらに *avr* などを含む病原性関連遺伝子がより長大なクラスターをなしていること、これらの制御が単一のカスケードによるのではなく、多くの異なった制御機構が複雑に制御しあっていることなどが明らかになってきました。また、*hrp* などの type III 分泌システムによって分泌されるタンパクが必ずしも harpin だけではなく、Hrp 線毛 (*hrpA*) やさらに複数のタンパクがあり、中には *hrpW* のように harpin と pectate lyase の両方のモチーフを持つものがあることが報告され興味深いものがありました。また、Hrp 線毛の役割がくりかえし強調され、特に感染過程の切片の電子顕微鏡観察で Hrp 線毛が植物細胞壁を貫通していると思われる像が発表され、しかもこの細菌の着着と繊維形成が菌体の側面ではなく端で起こるらしいことも示され大変印象に残りました。このように *hrp* システムの上流と下流に向かって研究が大きく進んでいることがわかりますが、植物からの直接のシグナルとそれを受け取るところが homoserine lactone 類以外にあまりよくわからないことや、type III 分泌システムによって分泌されるタンパクがさらにどんな反応を植物の中でおこすのかが、これからの課題になって行くところだと思われました。この分野で特に手法的に注目されたのが Yeast two-hybrid system を用いたタンパク相互作用の解析と、Transient *Agrobacterium* assay を用いた弱い *avr* と植物タンパクの相互作用の検出などで、多数報告されており、今後常法となることが予想されました。また、植物病原細菌でもついに Differential display-RT-PCR が応用されるに至り、今後の進展が期待されます。さらに、この分野で人間と植物の共通感染細菌とされる *Pseudomonas aeruginosa* が研究対象となってきたことも注目されました。一方、*Ralstonia solanacearum* とアラビドプシスを用いた青枯病抵抗性遺伝子の解析も始められているようです。

バイオコントロールの分野では相変わらず *Pseudomonas fluorescens* と *Burkholderia cepacia* が多用されていましたが、少しずつメカニズムの研究が進んできたところと思われます。抗菌物質を過剰生産するようにした試みがありましたが、実際にはさほど際だった効果は出ず、むしろ他の要因について、例えば全身抵抗性を誘導するメカニズムなどの研究も進展しているようです。

同定分類に関しては、生物多様性や迅速診断などのカテゴリで扱われていました。この中では *Xanthomonas campestris* pv. *zinniae* がトマトに病原性があるという報告や、*Pseudomonas syringae* によるバラの枝枯病の報告、*Xanthomonas campestris* pv. *campestris* にレース分化があるという報告などが興味を引きました。さらに分類手法としては REP-PCR や BOX-PCR や AFLP などを用いた類別と迅速同定の発表が目につきました。*Xanthomonas*

の分類については単独のイブニングセッションがあり、ディスカッションができるかと思っていたのですが、実際には DNA homology group が REP-PCR や AFLP などによって区別、同定できるというアメリカの Lacy らのグループの一方的な発表があっただけで、本質的な議論はないまま終了しました。この結果、今後ともしばらくの間、いろいろな人たちがそれぞれバラバラの分類体系あるいは学名を採用することになりそうで、決着はつきそうにありません。とにかく、今回の発表では病原性やその他の表現形質を無視した DNA や PCR 一本槍の発表が目につき、とてもこれでは現場のニーズに対応できないのではないかと感じてしまいました。

最後に、非公式なセッションのなかで、ゲノムプロジェクトについての話題がもちあがりました。種々の植物病原細菌について全ゲノムのシーケンシングを行うのを世界のいろいろな研究機関が重複のないように分担してはどうかという話で、今後、具体化したときには是非日本も参加して推進されることが必要であると感じました。

(瀧川雄一)

4. ファイトプラズマ病

ファイトプラズマ関連はポスターセッションに 8 題のみであったが、色々なジャンルに分離されていたこともあり、すべての著者から直接話を聞くのは困難であった。また、ファイトプラズマ研究者の主要メンバーが直前にシドニーで開かれた国際マイコプラズマ学会 (IOM) へ出席し、そのうちほんの数名を除いて、多くが ICPP へは参加しなかった模様である。以下に、発表の概要を、簡単に分類して記す (かっこ内はポスター番号)。

診断と検定：① 今となつてはなつかしい Dienes 染色と DAPI 染色、そして超薄切片法による診断法を比較したもの (3.3.1)。結論は、Dienes 染色が実用的。② 中央アメリカでトウモロコシの重要病害である「corn stunt complex」は maize bushy stunt ファイトプラズマ、スピロプラズマ (*S. kunkelii*) と maize rayado fino ウイルスの 3 者が関与する。PCR と ELISA の組み合わせで育種圃場の検定品種を調査した結果、ファイトプラズマとスピロプラズマが 3 か国ではじめて検出されたほか、感染率はスピロプラズマが最も高く、ウイルスはやや少ないものの被害が大きくなる可能性がある。これらは、従来の病徴診断ではわからなかったことであり、新しい検定法の普及によつて的確に診断することが望ましい (3.3.37)。

新病害と分類：③ ニュージーランドのイチゴ、cabbage tree と boysenberry から PCR で検出されたファイトプラズマはアサの yellow leaf 病原と同一であった (6.20)。④ トネリコ類とライラックに感染する Ash yellows の系統間の異同を PCR とモノクローン抗体を用いて調べた結

果、リボソーム遺伝子と病原性に多少の変異は認められるものの、同一分類群に所属することがわかった。2属のヨコバイの少数個体からファイトプラズマが検出されたが、媒介種は未確定(2.2.11)。⑤タイのサトウキビに発生する white leaf と grassy shoot, およびイネ科植物の white leaf ファイトプラズマの相互関係について、リボソーム遺伝子の RFLP などではサトウキビの2種は同一グループに属し、イネ科植物のものとは別グループを形成する。既知の媒介者以外のヨコバイからもファイトプラズマが検出され、媒介者の可能性が示された(2.2.99)。⑥キマダラヒロヨコバイで媒介される12種の日本産ファイトプラズマ病は、検定植物への虫媒伝染と16Sリボソーム遺伝子による解析の結果、同一の病原によって起こることがわかった。本病原は X-disease と近縁である(2.2.24)。

媒介：⑦キリてんぐ菓病がクサギカメムシで媒介されることが再確認された。さらに、本病原の16Sリボソーム遺伝子において、接種源のキリ、保毒ヨコバイと発病ニチソウの3者共に、それぞれ複数のクローンについて、2種のわずかに変異した配列が認められ、この2種が伝染に含まれていたことが示唆された(3.7.33)。

膜性タンパク質：⑧ファイトプラズマの培養が不成功であることの理由の一つとして、植物細胞膜および昆虫細胞膜と病原の外被膜との密接な関係が必須であるという可能性がある。アスターイエロースの1系統について、抗体を用いて精製したタンパク質の配列に基づいて得た PCR 産物中に膜タンパク質の遺伝子と推定されるものを得た(1.5.9)。

結び：思い起こせば、ちょうど30年前、1968年の8月にロンドンで開かれた記念すべき第1回ICPPで、明日山秀文教授が、前年に日本植物病理学会報に掲載されたばかりのマイコプラズマ様微生物(MLO)について、公式には恐らくはじめて国際的な場で講演されて大きな反響を呼び、会議委員長をつとめられたF.C. Bawden博士はじめ世界中の人々から賞賛されたと聞いている。筆者としては、いささかの感慨を抱いて参加した会議であったのだが、そんなことを語り合う相手もなく、この分野としては寂しい印象の会議であった。

なお、本稿を草するにあたり、項目検索機能のない要旨集とCD-ROMにめぐらずファイトプラズマの項目を検索しご教示いただいた田中 穰氏に深謝の意を表する。

(奥田誠一)

5. ウイルス病

エディンバラの街は築100年以上のビルが多くその外観は渋いすい茶系で統一され、まさにイギリスの古都と呼ぶにふさわしい落ち着いたたたずまいを見せていた。大会委員長でエディンバラ王立植物園長のイングラム博士、お

よびアン王女の開会の辞では、21世紀なかばには世界の人口が現在の倍の110億人になると予想されるなかで、食料問題と作物保護の重要性がさかんに強調されていた。この傾向は大会のプログラムに強く現れていて、5年前の第6回モントリオール大会と比較してまさに植物分子病理学とでも呼びたくなるほど分子レベルでの研究が進みつつあることと合わせて、21世紀問題と分子レベルの研究が今大会の2本柱ようになっていた。このため病原別セッションが少なくなっていたが、今後の植物病理学の進むべき方向性がプログラムに示されているように感じられた。

しかしこのためにウイルスの発表があちらこちらの会場に散らばってしまった。ウイルスだけのセッションは「ウイルスの病原性」「ウイルス抵抗性のメカニズム」「ウイルスと媒介生物の関係」のわずか3セッションのみで、他のウイルス関連の発表は他の病原と一緒にセッションの中に紛れ込んでいた。タイトルだけのプログラムが無かったために、3冊もの重い要旨集を広げてウイルス関連のポスターやシンポジウムでの発表を探し出すのはきわめて大変な作業であった。またメイン会場から遠く離れた2会場のシンポジウムも聞くことができなかった。このため、以下には重要と感じられた点の印象のみを記したので、個々のウイルス/ウイロイド関連の発表についてはお近くの参加者から要旨集のCD-ROMを借りて見ていただきたい。

「ウイルスの病原性」では、宿主植物にウイルスタンパク質がどのように分子レベル/細胞レベルで働いているのか、あるいは植物側の分子レベルでの反応に関する発表が多かった。ますます分子レベルの研究が進み、特に植物の反応と病徴発現、ウイルスの移行、ウイルスの病原性の解析に目覚ましい進歩が感じられた。この中では、ウイルスRNAが増幅している細胞を識別する方法が目をついた。「ウイルスと媒介生物の関係」のシンポジウムは、レビュー的な話題提供であった。「ウイルス抵抗性のメカニズム」において今大会のウイルス関連で最も活発な発表をしていたのは、間違いなくイギリスのBalcombe博士のグループのジーンサイレンシング関連のものであり、ポスターと合わせると相当量の研究であった。ジーンサイレンシングとは過剰に発現したRNAを分解する機構のことで、植物に自然に備わっている。このジーンサイレンシングは、ウイルスに対する植物の水平抵抗性に関与している。さらに、ジーンサイレンシングを打破するようなウイルス遺伝子、あるいは「recovery」とウイルス間の干渉作用なども注目された。

また遺伝子組み換え植物利用のセッションがあり、ウイルス病害抵抗性作物について発表されていた。話は横道にそれるが、現地のスーパーでは遺伝子組み換えトマトピューレーの缶詰が売られていた。遺伝子組み換えトマト缶は29ペンス(約75円)であったのに対し、通常のトマトから

作った一回り小さい缶が39ペンス(約100円)であった。販売上で遺伝子組み換えトマトの缶が成功しているのかわからなかったが、きちんと遺伝子組み換えトマトの使用を表示している点は、日本と大きく異なる点であろう。

最後になるが今大会で最も強く感じたことは、ウイルス感染に対する植物の水平抵抗性と垂直抵抗性のメカニズムが、いよいよ分子生物学的レベルで解明されつつあるという点であろう。この調子で研究が進展すると、5年後の2003年2月にニュージーランドで開催される大会では、植物ウイルス感染に対する植物側の応答の分子メカニズムの解明(たとえば局部病斑形成など)は、相当なレベルまで進展していると思われる。この分野での日本の植物ウイルス研究の遅れが、植物ウイルスを研究している者として、身にしみて感じられた。(夏秋知英)

【関連国際会議の概要紹介】

1. 9th International Congress of Pesticide Chemistry (ICPC)

第9回国際農薬化学会議は、1998年8月2~7日、連合王国、ロンドン市内 Queen Elizabeth II Conference Center を会場に開催された。今回の会議のテーマは、「The Food-Environment Challenge」であり、地球環境の保全を図りつつ、いかに安定で安全な食糧生産環境を構築するかを目標として、講演、ポスター発表、ディスカッションセッションでの討論が行われた。今回の会議の中で特に興味深かったのは、分子生物学を利用した植物-病原微生物の相互関係の解析により明らかにされる病害発生のメカニズムをターゲットとして、化合物のデザインや *in vitro* スクリーニングを行うことが農薬開発の能率をあげるために必要であることに農薬開発に携わる会社や研究所の研究者が気づき、重視していることが報告されたことで、植物病理学分野の研究者が日夜努力して行っている基礎的な研究結果が今後さらに重要な意味をもつ可能性が示された。また、このほかにも、最近注目されている植物の病原菌に対する抵抗性を誘導する薬剤の作用機構に関する研究、薬剤抵抗性病原菌の発現機構に関する研究、植物病原菌を用いた除草用生物農薬の研究、環境に対するインパクトが比較的少ないと考えられる微生物源活性物質の農薬としての利用に関する研究などが植物病理学と密接に関連するトピックとして、また、殺虫、除草、合成、製剤分野等における研究も数多く報告され、盛んにディスカッションされた。本会議は、約60カ国から1500名、日本からは約120名(米国300名、連合王国300名、ドイツ250名に次ぐ)が参加し、招待講演約35題、ポスター約1000題による発表により行われた。会議の運営のシステムとしては、前日の発表内容のトピックをまとめた「Daily News」が翌朝会場入り口で配布されたのが印象的で、好評であった。開催場所がロ

ンドン市内中心部のビッグベンやウエストミンスター寺院に隣接しており、天候も良好であったため、とても活気のある明るい雰囲気の中で終始した。同会議で発表された内容の一部は、Pesticide Science 誌に、Extended summary として掲載される予定である。

なお、本会議には、学会より海外学術交流助成金をいただき、9th ICPC と併せて参加いたしました。このような機会をいただきましたことを大変感謝申し上げます。

(有江 力)

2. Symposium on Tobacco Mosaic Virus: Pioneering Research for a Century

このシンポジウムは、1998年8月7~8日にスコットランド、エディンバラの王立医学院の威厳のある建物で開かれた。1898年にオランダのベイジェリンクが微生物と異なる病原体として記述したときから100年ということ記念して開かれた。参加者はおよそ100人で、20人ほどの著名な研究者がスピーカーをつとめ、タバコモザイクウイルス(TMV)研究の歴史、学問への寄与を振り返った。TMVの研究の歴史100年を実際にたずさわった研究者が順に20~25分で紹介したのである。これだけの人の話を間近で聞ける喜びを若い研究者たちがもらしていた。

最初のセッションは Aaron Klug が座長をつとめ、構造解析の歴史を振り返った。*in vitro* での粒子形成に関する速度論、中間体の解析(Casper, Butler)、ウイルスの種類による微妙な構造の違い(Stubbs)、粒子とサブユニット状態との抗原性の比較(Van Regenmortel)などが紹介された。

次のセッションは岡田吉美先生が座長をされた。TMV粒子形成の解析、遺伝子操作の時代に入ってから研究進展を概説された。このような席で、日本人として歴史に名を連ねて、流暢な英語で総括される姿に感銘を受けた。TMV粒子の再構成の発見者である Fraenkel-Conrat が高齢、声帯の障害で短時間であったが壇上に登場、大半は奥様の Singer が元気よく研究の歴史を紹介した。齢を重ねても学問へかける熱意が伝わり、参加したとくに若い人に刺激をあたえた。1982年に全塩基配列が報告されるまでは *in vitro* のタンパク質合成系の実験などで遺伝子産物の分子量が推定され(Zaitlin)、全塩基配列の決定がすすむにつれ、種々の TMV の配列のホモロジー等から、進化・分類が議論されている(Gibbs)。TMVの遺伝子発現の研究においてその時々新しい技術の大きな貢献を確認させられた。昼食をはきんで、次のセッションは Bryan Harrison が座長をつとめ、建部 到先生がはじめたプロトプラストへの感染系、*in vitro* のタンパク質合成系の実験等を総括した。感染初期、ウイルス粒子が細胞内に侵入した際の cotranslational disassembly の解析(Shaw)、*in vitro* で

の生化学的解析, 他のウイルス産物とのホモロジー等にもとづいたゲノム RNA 複製の分子メカニズムの現在の理解 (Buck), PVX や BSMV との移行タンパク質遺伝子の機能の互換性 (Atabekov), TMV の移行タンパク質のリン酸化の解析, シロイヌナズナをもちいた宿主因子に関する変異体の単離 (Citovsky) などが総括された。1日目の最後は Bos が, ベイジェリンクが 100 年前に行ったことを回顧した 2 日目はシンポのオルガナイザーでもある Wilson が座長をつとめ, cotranslational disassembly の話と形質転換による植物ウイルス抵抗性の話を総括した。TMV ベクターをもちいた物質生産を最近ビジネスにした Biosource の Turpen が現状 (のおそらく一部) を紹介, Dawson がコートタンパク質と *N'* 遺伝子をもったタバコでの病徴の関係, Baker が alternative splicing を含めた *N* 遺伝子の発現と抵抗性の関係, Beachy がコートタンパク質の発現によるウイルス抵抗性のメカニズムについての考察をした。各セッションの間はコーヒーを飲みながら十分に議論ができるように時間がとられるなど派手さはないが非常に充実したシンポであった。欲をいえば, 最近, 北大の石川らが単離した TMV 複製に関するシロイヌナズナでの宿主遺伝子のことが紹介されたらさらに盛り上がったであろう。世界からの若い研究者が地位を確立した研究者と身近に接している姿をみると今後が楽しみとなった。

(渡辺雄一郎)

3. 6th International Mycological Congress (IMC)

1998年8月23日から8月28日イスラエル国, エルサレムにて第6回国際菌学会が開催された。日本の植物病理学会関係者としては私のほか, 三重大学 高松 進助教授, 名古屋大学 柘植尚志助教授, 岡山県農試 那須英夫氏の3名が参加, 発表を行った。総演題数は714題を数え, セッションは遺伝子発現・制御, 細胞生物学, 形態形成, 分類, 集団遺伝, 進化, 二次代謝, 病原性, 宿主-病原菌の相互作用, 植物病理の応用的研究, 診断など総計46の多岐にわたり, 口頭発表, ポスター発表により各分野での第一線の研究報告と活発な議論が行われた。開催時期が折しもイスラム原理派によるとみられるテロ事件の勃発と米国の報復という国際政治上の混乱の渦中に重なり, 緊迫した面もちで参加したが, 開催地はとくに過敏な反応をしているわけではなく至って平穏に思われた。参加者数は前回のカナダ, バンクーバーでの開催に比して少ないと聞いたが, 巨大化し, ややイベント化したきらいのある学会に比して, 多様な話題が提供されつつ, なお密接な議論と交流ができる適切なサイズの学会の規模ではなかったかと思われた。学会会場は国際会議場を使用し, 会場の設備, 宿泊施設も充実し, 運営も極めてスムーズであった。レセプション, エクスカーションなども趣向を凝らした企画であったように思

われた。エルサレムと言えば, ユダヤ教, イスラム教, キリスト教の重要な聖地であり, それだけに歴史的な争いも絶えなかったわけであるが, 宗教的価値観, 血なまぐさいといってもよい政治史に対する評価を別にしてエルサレムという町から人間の精神のもつエネルギーのようなものを感じざるを得なかった。というかありていにいえば「執念」のようなものを感じさせてもらったような気がする。そういう視点で振り返ってみれば, 今回参加した学会での他の追従を許さないとと思われる (私からみれば愕然とする) 優れた研究もその研究者の執念といったものこそがその成果の根っこにあるように思われた。時代を経てなお残る研究をしなければならぬと自戒しながらエルサレムを後にした。

なお, 菌学会後, サテライトミーティングとして2泊3日にわたって開催された炭そ病ワークショップに参加し, 各国の炭そ病研究者と交流を深めることができたのは私自身にとって貴重な経験であった。 (久保康之)

4. 中国科学技術協会学術年会および中国植物病理学会

私は日本植物病理学会平成10年度海外交流基金による助成金を受け, 今年8月に北京で開催された中国科学技術協会第3回学術年会に参加し, 学術発表を行いました。

中国科学技術協会 (China Association for Science and Technology) は中国の165の学会, 学術団体を統括する非政府機構で, その学術年会は3年に一度開かれる中国の最高レベルの学術会議です。今回の学会は国内外のトップレベルの研究者を含め, 約700人が中国北京の科技会堂に集まり, 「信息科学与微电子技术」, 「生命科学与生物技术」, 「材料科学与工程技术」および「资源环境科学与可持续发展技术」の4つの分会に分かれ, 学術交流を行いました。私が参加した「生命科学与生物技术」分会は生物学, 医学, 農学など7つの領域で計170の論文が発表されました。参加者全員が科技会堂の付属ホテルに泊まり, 夜の特別講演, 学術ゼミなどに積極的に参加し, 効率良く, 活気のある研究交流は印象的でした。また中国植物病理学会も中国科学技術協会のメンバーであり, 今回の学会で植物病理関連の報告が多数ありました。

学会後, 私は中国農業大学を訪問し, 中国植物病理学会の状況などについて前任理事長の劉儀教授 (Prof. Y. Liu) に聞きましたので, ご紹介します。中国植物病理学会は1929年に設立され, 当時会員は30人あまりでしたが, その後いくつかの時代を経て, 1997年現在で個人会員5717人, 団体会員38の大きな学会に発展しました。学会は4年に一度全国大会を開き, 3カ月に1回学会誌「植物病理学報」を発行しています。組織的には10の専門委員会 (Academic committees): 植物病原真菌 (Mycology and Fungus Diseases), 植物病原細菌 (Bacteriology and Bacterial

Diseases), 植物病原線虫 (Nematology and Nematode Diseases), 植物ウイルス (Virology and Virus Diseases), 植物病害検疫 (Quarantine), 生物技術 (Biotechnology), 土壌伝播病害と生物防除 (Soilborne Diseases and Biological Control), 病害抵抗性植物育種 (Resistance of Host and Breeding), 植物病害流行予報 (Epidemiology), 植物病害総合防除 (Integrated Disease Management) および 1つの専門グループ (Academic group): マイコトキシン (Mycotoxin) に分かれて, それぞれ適当な時期に研究成果の発表, 話題の病害, 技術などについてシンポジウム, 談話会を開催します。全国学会のほか, 26の省ないし市レベルの植物病理学会があり, 研究交流のほかには農村地帯, 農家への科学技術の普及に力を入れています。

中国植物病理学会は国際交流も積極的にを行い, 1983年に国際植物病理学会のメンバーとなり, 現在4人の会員がその理事をつとめています。また, 「国際植物病害生物防除ワークショップ」 (International Workshop on Biological Control of Plant Diseases, 1996) など重要な国際会議も主催してきました。1998年3月に中国植物病理学会の全国大会が開かれ, 新しい理事会が選出されました。現在の理事長は中国科学院院士, 中国農業大学の曾士邁教授 (Prof. S.M. Zeng, Department of Plant Pathology, China Agricultural University, Beijing 100094, China) です。

(顔 瑾)

5. IUFRO Working Party: Rusts of Forest Trees

日本植物病理学会より海外学術交流助成金を受け, フィンランドにおいて1998年7月30日~8月9日に開催されたIUFRO (世界林業試験研究機関連合) ワーキングパーティー「樹木さび病部会国際会議」の国際会議に参加する機会を得た。本会議は, 前回まではマツ類のさび病についてのみの研究成果発表の場であったが, 今回から会議の活性化を図る目的でその研究対象を広げ森林樹木一般のさび病についての発表の場となった。したがって, ヤナギ類に寄生するさび病菌を研究材料とする筆者にも参加・発表する機会が与えられた訳である。さて, 本会議はフィンランド北部のラップランドのIvalo市近くにあるSaariselkaという町で行われた。会場となったホテル周辺はヨーロッパアカマツとカンバ類が混在する森林からなり, 時折トナカイとも出会うことができた。このような雄大な自然に囲まれた中での会議は樹木病害を扱う者にとって実に有益なものであった。また会議に先立って行われたプレエクスカーションでは, ヨーロッパ最北端の地であるノルウェーのNordkapp (North Cape) まで往復したが, その道中, アカマツを中心とした針葉樹林からツンドラ植生への景観の変化を観察でき, 目的地のNordkappでは天候には恵まれなかったものの, 白夜を体験することができた。Saariselka

も北極圏に入っているため, 白夜とまではいかないが午後10時を過ぎても十分に明るく, 深夜0時を過ぎても闇に包まれることはなかった。そのためか会議期間中歓待の宴が夜遅くまで催され, うれしい反面これが連日となるとやや閉口した。本会議には, 12カ国41名が参加し, そのうち日本からは筆者を含め4名が参加した。発表は口頭30題, ポスター8題, 計38題がなされた。研究対象としては, マツ類に寄生して様々な病害を引き起こす *Cronartium* 属菌をはじめ, ポプラ・ヤナギ類葉さび病菌である *Melampsora* 属菌やトウヒ類葉さび病菌である *Chrysomyxa* 属菌などについての発表がなされ, 内容については伝統的な形態分類をはじめ, 病原性レースの個体群構造の解明や分子分類, あるいは宿主の抵抗性解明に関する分子生物学的アプローチなど多岐にわたり, 大いに刺激を受けることとなった。筆者の発表内容に関しても, 他の参加者より貴重な意見をいただき, 今後の方向性を決定する上で非常に参考になった。会議中の現地検討会およびポストエクスカーションでは, Ivalo市およびRovaniemi市周辺の森林および樹木病害について, 本会議のorganizerであるフィンランド森林研究所ロバニエミ支所のRisto Jalkanen博士および他研究員のレクチュアを受けた。ヨーロッパアカマツのResin top diseaseによる被害地などを見学する中で, これらのアカマツが胸高直径20cmに達するのに200年をも要するにもかかわらず天然更新で林業が成り立っていることを知り, その森林の広大さを実感した。また, 会議終了後, RovaniemiからHelsinkiへの道すがら, アカマツやシラカンバの丸太を積んだ数十台もの貨車が牽引されるのを幾度も目にし, 世界で最も林業に経済を依存するといわれるフィンランドの森林資源の豊かさを改めて感じた。今回の本会議は2002年中国北京市で開催されることが決定された。隣国での開催ということで日本からもより多くの研究者が参加されることを期待する。最後に, このような機会を与えていただいた多くの方々に感謝の意を表したい。

(中村 仁)

【会員の動静】

1. 人事

- (1) 大学関係 (平成10年11月1日現在)
 - 露無慎二 H 10.4 静岡大農学部 遺伝子実験施設長 (併任)
 - 加藤久晴 H 10.4 福井県大生物資源学部 講師 (新規採用)
- (2) 農林水産省関係 (平成10年6月~7月)
 - 農水省機関の病害関係で室長以上の人事異動, および新規採用はありませんでした。
- (3) 県関係 (平成9年8月~平成10年7月)
 - 落合政文 H 10.3 退職 (福島県果樹試験場長)

- | | | | | | |
|--|---------------|---|------|--------|--|
| 木村貞夫 | H 10.3 | 退職 (長崎県総合農林試験場次長) | 大西 純 | H 10.9 | 東京農工大 博士(農学) トマト黄化えそウイルスのダイズウスイロアザミウマ (<i>Thrips setosus</i>) 体内における局在とウイルス伝搬性に関する研究 |
| 桑田博隆 | H 10.4 | 青森県農業試験場病虫肥料部長 | | | |
| 太田恵二 | H 10.4 | 青森県農業試験場環境部研究管理員 | | | |
| 武田眞一 | H 10.4 | 岩手県農政部農業普及技術課課長補佐 | | | |
| 本蔵良三 | H 10.4 | 宮城県普及センター次長 | | | |
| 東海林久雄 | H 10.4 | 山形県農業改良普及センター所長 | | | |
| 大沼幸男 | H 10.4 | 山形県園芸試験場長 | | | |
| 藤田靖久 | H 10.4 | 山形県農業試験場研究主幹兼作物部長 | | | |
| 田中 孝 | H 10.4 | 山形県農業試験場病理昆虫部長 | | | |
| 善林六朗 | H 10.4 | 埼玉県園芸試験場長 | | | |
| 名畑清信 | H 10.4 | 富山県普及技術課専技班長 | | | |
| 福西 務 | H 10.4 | 京都農業総合研究所環境部長 | | | |
| 岡山健夫 | H 10.4 | 奈良県農産普及課環境係 | | | |
| 入江和己 | H 10.4 | 兵庫県病害虫防除所副所長 | | | |
| 松本邦彦 | H 10.4 | 山口県病害虫防除所長 | | | |
| 奈尾雅浩 | H 10.4 | 徳島県病害虫防除所主査 | | | |
| 吉村大三郎 | H 10.4 | 福岡県農業試験場長 | | | |
| 松崎正文 | H 10.4 | 佐賀県農業試験研究センター土壌環境部長 | | | |
| 太田孝彦 | H 10.4 | 長崎県果樹試験場次長 | | | |
| 小牧孝一 | H 10.4 | 熊本県農業専門技術員室専門技術員 | | | |
| 田村逸美 | H 10.4 | 宮崎県農林水産部営農指導課主幹 | | | |
| 和泉勝一 | H 10.4 | 鹿児島県農業試験場病虫部長 | | | |
| 鳥越博明 | H 10.4 | 鹿児島県農業試験場大島支場病害虫研究室長 | | | |
| 池田幸子 | H 10.4 | 北海道病害虫防除所(新規採用) | | | |
| 上谷明美 | H 10.4 | 福井県農業試験場生産環境部病理研究グループ(新規採用) | | | |
| 加藤光弘 | H 10.4 | 静岡県柑橘試験場(新規採用) | | | |
| 2. 学位取得者 (課程博士) | | | | | |
| 藤田泰成 | H 10.5 | 京都大 博士(農学) Role of Bromovirus 3a Movement Protein Gene in Host Specificity | | | |
| 清水公德 | H 10.7 | 京都大 博士(農学) Genetic Analysis of Melanin Biosynthesis in <i>Cochliobolus heterostrophus</i> and Its Application for Phylogenetic Study of Graminicolous <i>Helminthosporium</i> | | | |
| 3. 海外長期出張者 | | | | | |
| (1) 大学関係 | | | | | |
| 杉浦巳代治 | H 10.2 | アルゼンチン (JICA 植物ウイルス研究計画) ~12.2 | | | |
| (2) 農林水産省・県関係 | | | | | |
| 匠原監一郎 | H 7.3 | アルゼンチン植物ウイルス研究センター計画 (JICA プロジェクト) ~12.2 | | | |
| 宇杉富雄 | H 7.6 | アルゼンチン植物ウイルス研究センター計画 (JICA プロジェクト) ~12.2 | | | |
| 鬼木正臣 | H 8.5 | メキシコモレロス州野菜生産技術改善計画 (JICA プロジェクト) ~10.5 | | | |
| 石島 嶺 | H 9.4 | パラグアイ, 国立農業研究所 ~11.3 (JICA プロジェクト) | | | |
| 小澤龍生 | H 9.5 | ブラジル, サンジョアキン試験場 (JICA プロジェクト) ~11.5 | | | |
| 佐藤俊次 | H 9.6 | パラグアイ, 国立農業研究所 ~11.5 (JICA プロジェクト) | | | |
| 柳瀬春夫 | H 9.12 | ブラジル, サンジョアキン試験場 (JICA プロジェクト) ~10.12 | | | |
| 佐久間勉 | H 10.2 | ウルグアイ, 国立農牧研究所サルトグランデ試験場 (JICA プロジェクト) ~12.2 | | | |
| (3) 農林水産省・県関係帰国者 | | | | | |
| 津田新哉 | H 9.1 | カリフォルニア大 ~9.12 | | | |
| 竹原利明 | H 9.1 | カリフォルニア大 ~10.1 | | | |
| 小野木静夫 | H 6.3 | パラグアイ農業総合試験場 (CETAPAR) (JICA プロジェクト) ~10.3 | | | |
| 三枝隆夫 | H 6.4 | パキスタン植物遺伝資源保存研究所 (JICA プロジェクト) ~10.5 | | | |
| 4. 外国人研究者の長期滞在者 | | | | | |
| (1) 農林水産省・県関係 (平成9年10月~平成10年7月) | | | | | |
| 顔 瑾 (中国) | H 7.10~H 10.9 | 農研センター ウイルス病研究室
研究内容: 植物ウイルスの昆虫媒介機構 | | | |

李 貴宰 (韓国) H 9.9~H 10.7

農研センター ウイルス病研究室

研究内容: ウイルス遺伝子機能・形質転換植物

李 載洪 (韓国) H 10.7~H 11.3

富山県技術センター 農業試験場

研究内容: 野菜病害の病原同定と防除

農薬の効用; 農薬の作用機構; 農薬の毒性, 残量基準・使用基準ならびに残留の実態; 農薬の選択性と薬害; 生物農薬; 農薬問題に対する社会的対応; 農薬学各論, ソフトサイエンス社, ¥3,000

【書評】

1. 渡邊恒雄:『植物土壌病害の事典』 朝倉書店, 272頁, 1998年7月, ¥12,000

著者である渡邊恒雄氏は高名な W.C. Snyder 先生のお弟子さんである。著者は土壌病原菌の生態を常に念頭に入れ, そのための分類に精通している貴重な学者である。本書の内容を見ると 1980 年より多年月にわたり専門雑誌に連載された『植物の土壌病害』が骨子となっており, その一部は 1993 年既刊の『写真と図解 土壌糸状菌』であり, 同書は続いて英訳され, 国内外で高く評価されている。本書はこれらを含め, あらためて現在までの土壌伝染性植物ウイルス, 細菌, 糸状菌の分類, 生態, 生態的防除に関する国内外の研究成果を整理し, 集大成されたと考える。

本書は第 I 編と II 編, III 編に分かれ, 構成されている。第 I 編は 6 章からなる総論である。その内容は, 土壌病害と土壌病原体の生態, 土壌病原体の種類とその病害, 土壌病害の診断, 土壌病原体の決定に関する諸問題, 土壌病原菌の行動と関連する諸因子との生態学的な諸問題, 最後は簡潔に土壌病害研究と分子生物学に触れ, 以上について多くの事例を引用し, 著者の土壌病害に対する見解をまじえ, 解説されている。特に第 2 章には, 植物ウイルスを含め, 主な土壌病害についてその病因, 寄主植物名および病名を一覧表に整理し, 特に糸状菌の場合は異名等が併記され, わかりやすい。また, 第 5 章は第 II 編各論のうち, 最も重要な土壌病原糸状菌とその病害に関連があり, 12 の項目に分け詳述されており, あらかじめ理解しておきたい章である。

本書の 7 割強を占める第 II 編は各論であり, 14 章から成っている。第 1 章は土壌伝染性ウイルス病であり, 線虫媒介, 菌媒介, 媒介者不明に分け, 病害の種類, 病徴, 病原の決定手段・性状などの解説である。第 2 章は放線菌を含む土壌伝染性細菌病であり, 病害の種類, 菌の分類・同定, 系統・レース, 検出技術, 土壌中の生存などが解説されている。第 3 章から 14 章までは土壌病原糸状菌とその病害についてであり, 著者の得意とする分野でもある。第 3 章アブラナ科根こぶ病とその病原菌, にはじまり, 結びは林木の土壌病害, 第 14 章 *Heterobasidion annosum* による根株心腐病であり, 計 12 属の土壌病原糸状菌とその病害について, (1) 特徴と分類・同定, (2) 菌の生態, (3) 寄主植物への侵入と感染, に大別して丁寧な解説がなされている。著者は国内外で最も重要な *Phytophthora*, *Pythium*, *Fusarium*, *Rhizoctonia* 属菌による 4 病害に関しては, さ

5. 会員の関連学会での受賞等

- (1) 原田幸雄: 日本菌学会賞「日本における果樹および森林樹木の病原菌の分類・同定に関する研究」(1998年5月16日)
- (2) 有江 力: 日本農薬学会賞(奨励賞)「土壌病害の免疫学的検診法に関する研究」(1998年3月27日)

【国際協力】

平成 10 年 9 月 ハノイ 農業大学教育支援プロジェクト (JICA) が調印され, 今後 5 年間九州一円の大学から長期, 短期の教官派遣と先方からの教官の受け入れが予定されています。なお, 団長は長 憲次九州大学名誉教授(農業経済学)です。 (佐古宣道)

【各種出版物案内】

1. 学会関連出版物

- ・『日本植物病理学会会員名簿』平成 10 年 11 月 日本植物病理学会, 頒価 ¥2,000 (購入申し込みは学会事務局まで)

2. 会員の各種出版物

- (1) 久能 均・白石友紀・高橋 壮・露無慎二・眞山滋志: 新編『植物病理学概論』感染と発病; 糸状菌病(菌類病); 細菌病とファイトプラズマ病; ウイルス病とウイロイド病; 線虫病と生理病; 病原性と抵抗性; 病気の伝染; 病気の診断; 農薬; 病害の防除; 植物病理学におけるバイオサイエンス, 平成 10 年 3 月 養賢堂, ¥3,800
- (2) 谷口 旭・羽柴輝良監修: 『応用生命科学のための生物学入門』生命現象の科学; 細胞の機能; 発生と分化; 植物と動物の生理; 生物と生態系; 進化と系統, 平成 10 年 4 月 培風館, ¥2,400
- (3) 駒田 且: 『野菜の土壌病害—その発生のしくみと防ぎ方』土壌病害とは; 糸状菌(かび)による病害; 放線菌による病害; 細菌による病害; ウイルスによる病害, 平成 10 年 6 月 タキイ種苗広報出版部, ¥2,000
- (4) 松中昭一: 『新農薬学—21 世紀農業における農薬の新使命』農薬の定義と命名法ならびに分類; 農薬の製剤と施用方法; 農薬の環境への影響と環境基準;

らに小項目に分け、詳細に解説されている。その内容から結論として、これら病原菌の豊富な分離法、検出法の研究成果は、より合理的な分類方式の確立や土中におけるこれら病原菌の生態解明に役立ち、ひいては感染能力の解明に運動するものと解釈される。なお国内では古くから研究されている紫紋羽病は、不完全世代が *R. crocorum* に属するため、*Rhizoctonia* 属菌の章に僅かに引用されている。このような例は本書の随所に見られ、その数は80属以上のほり、さらなる続刊を期待したい。本書の第III編は、土壌病害の生態的防除であり、序論および前述各論の14病害のうち、10病害(ならたけ病と根株心腐病は併記)について9章の各論から成っている。防除法の骨子は、抵抗性品種の利用を含む耕種的防除、湛水処理や太陽熱・温湯利用などの物理的防除、弱毒ウイルスや微生物利用による生物防除であり、多くの事例を取りあげ、簡潔に解説されている。なお、本書は、本文左欄外にキーワードを記載、末尾に事項索引(日本語、外国語別)・微生物索引の掲載、豊富な章ごとの文献(主に外国)および計290枚余の写真・図・表の掲載など、全編にわたって多大の便宜が図られている。本書の書評を依頼され、最初は走り読みした感想を述べるつもりでいたが、内容が豊富なため、多少の時間を費やした。つまり、本書は文字どおり事典なのである。あらためてこの大著を上梓された著者に心からの敬意を表するとともに、研究者は無論のこと多くの方々に、必要なときに必要な箇所を活用する事典として座右におかれることをおすすめしたい。

(荒木隆男)

2. S.T. コーワン著, L.R. ヒル編, 駒形和男・杉山純多・安藤勝彦・鈴木健一郎・横田 明訳:『コーワン 微生物分類学事典』学会出版センター, A5判/536頁, ¥8,000

原書は『A Dictionary of Microbial Taxonomy』(Cambridge University Press, Cambridge)である。著者のコーワン博士(S.T. Cowan)と博士の死後編集を引き継いだヒル博士(L.R. Hill)の紹介は巻頭でなされている。本書が微生物の分類と命名法分野で独創性が高く1978年に出版後すでに20年も経過したが質量ともにこれを凌駕する成書がないことから翻訳されたとのことである。もともとは1968年刊のOliverとBoyd著、『A Dictionary of Microbial Taxonomic Usage』(Edinburgh, 訳本は『微生物分類用語事典』として東京大学出版会から1977年刊行)の改訂版を目的としたが、あまりに広範囲の用語(1550項目)が収集されたために新たな単行本とされた経緯がある。はじめに「微生物の命名規約」、「分類学のための研究材料」、「分類の哲学」、「初期の細菌分類史」が述べられ、続いて用語解説がなされている。著者が細菌分類学者のためであろうか内容が細菌中心となり菌類関係の用語

の解説が少ないことと、この20年間にめざましい進歩を遂げた分子遺伝学、分子生物学や生物工学関連の用語に詳しくふれられていない点が問題となるが、全体的に科学哲学と該博な知識に基づく適切な批評がなされている。巻末には「細菌命名の動向」、「命名法体系の基礎と菌類命名の動向」、「菌類科名の標準和名」が付録として訳者たちにより補われている。微生物分類の読む事典として一読をすすめたい。

(渡邊恒雄)

3. 岸 國平編:『日本植物病害大事典』全国農村教育協会, B5判/1276頁, ¥50,000

本書は10年前に発行された『作物病害事典』の増補改訂版的性格をもっている。旧版は現場にあって病気と向き合う病理の研究者、技術者にとっては無くてはならない性格のものであった。私たちの総合研究センターでも背表紙が崩れるほどに使いこんできている。今回、10年を経て新しく『日本植物病害大事典』として刊行された。この10年間の植物病理研究の進歩を思えば、関係者に心待ちにされていた出版である。

旧版では食用作物、特用作物、牧草および芝草、野菜、草花、果樹、鑑賞樹木、不完全菌類の形態の8部からなっていたが、今回はそれに、林木と野生植物が加わり、不完全菌類の形態が削除され9部構成になっている。基本的な考え方として旧版同様に日本で発表されている病気についてはすべてが掲載されている。しかも、そのほとんどがカラー写真で示されている。この本の素晴らしいところはすべての病害を網羅しているということである。このような本は世界にも見当たらない。使うほうから言えば、ある植物の病気を見つけたとき、そのほとんどは本書に記述があり、本書に無いものは新病害の疑いが濃いということである。このことは実際仕事をしていく上では大変重要なことであり、それが今回、林木と野生植物が加わったことで、さらに充実したと言える。

また今回の新版ではいろいろと細かいところにも気を配って改良がなされている。その1,2をあげると病名に英名が記載されたこと、目次のところに色分けで病原がウイルスであるか、細菌であるか、糸状菌であるかがすぐわかるようになったことなどである。

ひとつ希望を言わせてもらうならば、序にも書かれているように、情報科学の進歩は目覚ましい。すでに多くのカタログ類がCDで配布される時代になっている。また、CABIから病虫害概要(Crop Protection Compendium)についてテスト版のCDも配布されている状況を見ても、できるだけ早くCD-ROM化をして欲しいと思う。いずれにしても、本書は手元においてぼろぼろになるまで使いこむ価値のある本であり、植物病害に関係する人の座右の書となって欲しいと思う。

(浅賀宏一)

【海外留学印象記】

「世界をリードする研究社会」

私が留学したカリフォルニア大学バークレー校は、アメリカ西海岸の代表都市サンフランシスコのとなり町、バークレー市に位置します。私は、Department of Plant & Microbial Biology に所属する Barbara J. Baker 教授の研究室に留学しました。Baker 教授の研究室は既に皆さんもご存じの通り、1994年に植物ウイルス（タバコモザイクウイルス）の抵抗性遺伝子「N」を世界に先駆けてタバコから単離しました。Baker 研究室では、教授をはじめとして18人中13人が女性でした。この研究室に限らず、室員の半数を女性が占めるのは珍しくありません。日本では女性の職場進出が叫ばれている今日この頃ですが、アメリカでは多くの女性が既に男性と対等の立場で仕事をしています。西欧諸国の研究室では、必ずと言っていいほど各研究室で数人のポスドクが実験しています。ポスドクはその研究室で一旗揚げた後その業績を引っ提げて、大学、公官庁さらに民間などへ研究者としての定職を求めます。求人広告を見ると、その職での研究従事比率が高ければ高いほど「ポスドクを2年以上経験している人」という応募条件が記載されています。将来研究者を目指そうとしている人たちには、ポスドクというポジションは避けて通れない一種の登竜門になっています。Baker 研究室のポスドクは、その出身学問領域がバラバラです。ある人は酵母の遺伝子発現であったり、またある人は動物のホルモンであったりと、とても日本の研究室では考えられないような状況がそこにあります。日本の研究者のように一つの学問領域を大学時代から究めようとするのではなく、若い時代にいくつもの学問領域を自ずと渡り歩いている様子です。それは過去の経歴でもそうです。大学、大学院、ポスドクのポジションと次から次に所属を変えていくのがこちらの評価されるスタイルと聞きました。若いときから色々な組織や学問領域を渡り歩くことによって、将来を担う研究者の卵に多くの知識と価値観を身につかせようとしています。採用する側の組織もその人を通して異分野の考え方を知ることができるというメリットがあるようです。相互に発展が望めるような社会構造を作り上げています。

世界の自然科学をリードしている西欧諸国では、一連の研究活動が上記に示した社会構造によって支えられているようです。日本の科学研究を憂いて平成7年に「科学技術基本法」が制定されたことは喜ばしいことですが、日本の研究が世界の研究と対等に立ち向かうためには法律だけではなく研究の屋台骨を支える社会構造も併せて変えていかなければならないような気がします。アメリカの小さな研究室から垣間見える、世界をリードする研究に多くを教えられました。

(津田新哉)

【学会事務局コーナー】

1. 学会事務局にご連絡いただきたいこと

以下のような場合は、速やかに学会事務局までご連絡下さいますようお願いいたします。

- ① 住所等の変更
- ② 学会誌等送付先の変更
- ③ 異動
- ④ 退会（会費を納入されない場合でも自動退会にはならず、ご連絡をいただくまでの会費が請求されます）

2. 平成11年度会費納入のお願い

平成11年度会費は、平成10年12月中に納入いただくことになっておりますが、まだ未納の方が多くいらっしゃいますので、お手元の振込用紙を使用して早急に納入いただきますようお願いいたします。会費を納入されない場合は4月に行われる大会で発表ができなくなり、また学会報に投稿できなくなりますので、ご注意下さい。銀行口座からの自動振込を新たに希望される場合も、平成11年度の自動振込手続きは終了しておりますので、今年度分は振込用紙を使用して納入下さい。

なお、本学会は大部分会費により運営されており、また、学会誌に対する文部省補助金の申請に会費納入率が関係して参りますので、必ず期限までに会費を納入いただきますようお願い申し上げます。

3. 学会費自動振込制度利用のお願い

日本植物病理学会では、事務手続の簡素化と会費納入率向上のため、学会費の銀行口座からの自動振込による納入をお願いいたしております。自動振込は、銀行・郵便局までお運びいただく必要がなくなる、振込手数料がかからない（学会負担）等、会員各位にも利便があります。まだ自動振込の手続きをされていない会員の方々には先だって会費納入のお願いと同時に自動振込の申込用紙を送付させていただきますので、是非この用紙をご利用の上お手続きの程お願い申し上げます。なお、只今お申し込みいただきますと、平成12年度会費よりの自動引き落とし（平成11年12月初旬）となります。ご不明の点、および自動振込申込用紙を必要とされる方は学会事務局までお問い合わせ下さい。

4. 日本植物病理学会会員名簿が刊行されました

平成10年11月に会員名簿（最新版）が刊行されました。今回の名簿は全会員を対象として実施した住所等調査票の回答結果をふまえ、7桁郵便番号および電子メールアドレス（希望された方）を含め、より正確なデータ掲載に努めました。頒価は2,000円と据え置いております。本名簿のご案内は学会報64(6)赤頁でさせていただきます、「申込み兼

振込用紙」も同号に綴じ込んであります。まだ若干の在庫がございますので、ご希望の方は「申込み兼振込用紙」をご利用の上、お早めにお申し込み下さい。

なお、名簿に掲載されている住所等に、誤り・異動等に伴う変更がございます場合は、名簿「目次」裏の「住所等変更届」用紙をご利用の上、学会事務局までご連絡をお願いいたします。

5. 学会事務局の動向

事務局では、鶴見典子、早坂美知恵(平成10年8月より)の2氏が日本農薬学会、日本応用動物昆虫学会および日本植物病理学会の3学会を担当しております。

日本植物病理学会事務局

〒170-8484 豊島区駒込1-43-11

日本植物防疫協会ビル内

日本植物病理学会事務局

Tel 03-3943-6021

Fax 03-3843-6086

編集後記

昨年夏に国際植物病理学会議と関連の国際学会が多数開催されましたので、本号でその模様を伝えていただきました。いずれの国際会議も大変広範な内容であったと思われませんが、国際植物病理学会議は、ISPPのCouncilメンバーの日比忠明先生に全体の概要を伝えていただき、専門分野は各先生方に病原ごとにまとめていただきました。大変お忙しいところ、また誌面の限られたなかにもかかわらず、広い分野の国際的な研究動向と学会の雰囲気を生き生きと伝えていただきました先生方に感謝申し上げます。(細川大二郎)

学会ニュース投稿宛先：日本植物病理学会事務局

学会ニュース編集委員会

Fax 03-3943-6086

E-mail: gakkai@blue.ocn.ne.jp (テキストのみ)